

よちいじゅ、 「みそぎの里」へ

廃校になり、子どもたちの声が聞こえなくなった御祓小学校。

「なにもないのは寂しい」

「なんかはせんといけん」――。

手探りで始めた

コミュニティカフェが今、

小さな実を結び始めました。

きっかけは店舗のリニューアル。

「御祓にあるもので地域のよさを伝えよう」と御祓らしさにこだわりました。

月2回のカフェですが、

多くの人が集まるようになり、

スタッフもお客さんも楽しそう。

無理のない活動が、

居心地のよさにつながっているそうです。

地域に愛される場づくりが、

地域の元気の源に――

人口減少が進む地方で、

小さな地域を持続するために

必要なことは何か？

コミュニティカフェ「みそぎの里」には、

その答えを考える、

たくさんヒントがありました。



＼おいしいと評判のランチ／



毎回内容が変わる「季節の定食」は700円。御祓地区の湧き水で作る各種ジュース(300円)も人気です。

【問い合わせ】
☎0893(43)0620

インスタグラムも始めました!



@misogi_sato

◀QRコードをスキャンすると簡単にアカウントを見られます。



みそぎの里スタッフ

(左から) 西澤温子さん、力石淳子さん、吉本三紗さん、泉綾子さん、水谷円香さん、向居鈴枝さん、上岡はるみさん、高山春美さん、西川真由美さん

会の女性部有志の皆さんと地域おこし協力隊の水谷円香さん。水谷さんは「リニューアルを機に地元産にこだわる場所にした。食事も水も飾る花も地元産。御祓地区の季節を感じてほしい」と笑顔で話します。黒板や時間割表など、元々職員室だったという雰囲気を手に残し、地元の人たちの思い出も大切にしているそうです。

料理人はいないけれど、主婦歴の長い女性たちが作る「家庭の味」は絶品。野菜の新鮮さと水のおいしさも加わり、御祓の味が存分に楽しめます。スタッフのアットホームな会話と笑顔が居心地よく、つい長居してしまう人も。住民の交流の場としても機能し、地域の元気につながっています。

にぎわう「みそぎの里」

「この天ぷらおいしい」「このおはぎ、昔ばあちゃんが作ってくれたのと同じ味よ」。喜ぶお客さんたちの声に、オレンジ色のエプロン姿の店員さんが笑顔でうなずいています。

ここは「みそぎの里」。閉校した御祓小学校の一部を改装した、コミュニティカフェです。平成26年に開店し、今年の5月にリニューアルオープンしました。新しくメニューに入った「季節の定食」が人気で、以前は10人弱だったお客さんが4倍に。第2・第4日曜日だけオープンするカフェですが、「背伸びをしない心地よさがいい」と迎える側にも迎ええられる側にも好評です。

御祓の魅力いっぱいのカフェ

切り盛りするのは、御祓自治



閉校した校舎に 笑顔と笑い声を

小学校がなくなるのは寂しい。そんな思いから、5年前に地域の人たちが始めたコミュニティカフェ「みそぎの里」。今、月2回の開店日には地域内外から大勢の人が訪れ、笑顔と笑い声があふれています。



1_リニューアルでよりカフェらしくなった店内 2_新設されたカウンター。「明るくて気持ちいいよ」 3_知人が来たら調理スタッフも表に出てごあいさつ 4_「家庭的な食事がいい」と笑う常連の男性



泉 綾子さん=只海=

変わることを楽しんで
心の中もリニューアル

大切な御祓小を何とかしたいと頑張ってきた先輩たちと、地域に新しい風を運んでくれた水谷さんが化学反応を起こしたんだと思います。カフェのリニューアルを機に、内装だけでなくみんなの心の中にも変化がありました。きっかけができたとき、料理が上手な人や飾り付けが上手な人、凄腕の大工のおじさんなど、それぞれが楽しんだ結果で面白い空間ができました。頼ったら力を貸してくれる男性陣もいて、一人一人が力を合わせれば、御祓地区はすごいことになると思っています。

皆さんが大阪出身の私を誘ってくれたことにも感謝しています。地域に知り合いが少なかったのが、関わることが楽しみでした。今は水谷さんとカフェ巡りをするなど、自分の中でも小さな化学反応が起きています。家にいるだけだと、変わることに消極的というか、疑問に思うこともなかったです。集まって話すことで、みんないろいろ考えているんだと刺激を受けています。カフェ以外にも、家や地域で挑戦できることはたくさんあると気づき、自分も変わることができました。



西川真由美さん=只海=

「みそぎの里」を
理想的なコミュニティの場に

2年前、約40年ぶりに御祓地区に帰ってきたとき、スタッフとして温かく迎え入れてもらいました。最初はみんな忙しい中、「地域のため」と時間もエネルギーも使っていましたが、お客さんが増えないもどかしさと徒労感を感じていました。でも、少しずつでも歩みを止めなかったことが今につながったと思います。大切だったのは大きな変化ではなく、ちょっとした変化の積み重ねでした。リニューアル後、営業が終わった後にみんなで話し合う時間ができたのもよかったです。地域の人たちのアイデアとおもてなしの心はすごいです。お客さんもたくさん来てくれるようになり、大変だったことが楽しいことになりました。

「コミュニティ」の名にふさわしいよう、もっと多くの人に知ってもらいたいし、カフェ以外の利用も増えたらうれしいです。地域の皆さんと一緒に大切な場所を守りながら、スタッフやお客さんのための環境を良くしていくことで、理想の形に近づけたらと思います。私もこれまでの経験を生かして飾り付けや接客で頑張ります。

「なんかはせんといけん」
もがき苦しんで開けた道――



久保 茂さん=北表=

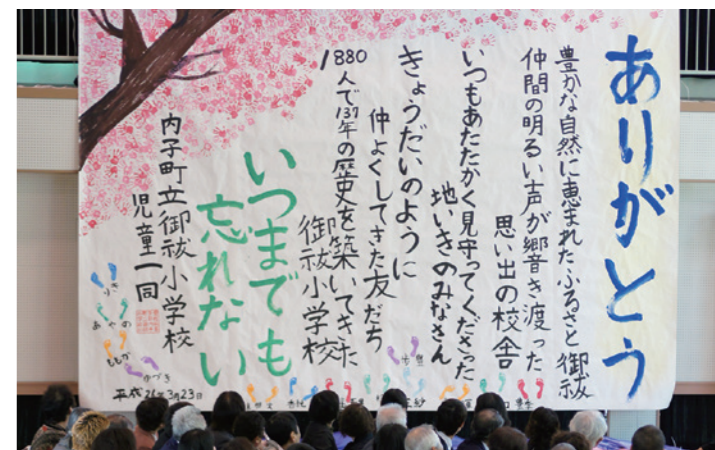
カフェがオープンする予定の1カ月前、発案者の元地域おこし協力隊員が退職し、私が開店に必要な手続きを代わりにしました。当時は自治会の事務局長をしていたので、カフェの人集めや運営を一任されていました。スタッフは完全なボランティア。たった3人を探すのにも一苦労です。電話でお願いとか、前日の準備や買い出しとか、仕事をしながらなので、本当に大変でした。

小学校がなくなった寂しさもあり、「なんかはせんといけん」という思いが強かったです。地域の人たちも大変だったけれど「やめたらええ」という人はいませんでした。みんなが少しずつ協力してくれて、なんとか続けることができました。

今、たくさんのお客さんを見て「続けてよかった」と思います。女性たちが生き生きしているのもいいですね。地域の未来を語れる場にもなっているので、次の世代が育つことにも期待しています。協力隊の水谷さんが私の役を引き受けてくれて、肩の荷は下りましたが知らんぷりはできません。みんなで「みそぎの里」を盛り上げたいです。

にぎわいが生まれた「みそぎの里」ですが、その裏にはたくさん
の苦労がありました。「これまで」と「これから」―― たくさん
の思いが集まる場所だからこそ、すてきな活動につながっていま
す。開店前から運営を支えてきた久保さんとI・Uターンの御
祓地区に来た2人の話には、地域への思いが詰まっています。

これまでの思い、 これからの思い、 ひとつになった場所



御祓小学校の閉校式で、児童が学校と地域に贈った言葉



御祓に吹くやわらかな風が、ふるさとへの思いを広げる――

私たちの思いを地域への愛に

「なんかはせんといけん――」。人々の思いが少しずつ集まったコミュニティカフェ「みそぎの里」が、地域の元気の源になろうとしています。「無理なく、楽しく」と陰で活動を支える地域おこし協力隊・水谷円香さんに思いを聞きました。

「無いなら作る」御祓地区

田舎らしい暮らし方が魅力の御祓地区。特に「無いならあるものを工夫して作り出す」という気概が好きです。協力隊として着任してから、その精神を受け継いで、ここにあるものを生かす活動をしたと考えるようになりました。「みそぎの里」にぎわいも、みんなの気概で作られてきたのだと思います。

カフェは地域力の結晶

特別なスキルを何も持っていない私が「力を貸してくれませんか」と声を掛けた結果、皆さ



地域おこし協力隊
水谷 円香さん=北表=

んの持っている力を発揮できる場が、自然とできました。例えばリニユアールの際、照明を取り替える作業の日には、専門知識のある人が何人も集まってくれました。カフェを盛り上げようとずっと力を貸してくれている向居さん夫婦は「ランチで使えるように」と育てる野菜の種類をたくさん増やしてくれました。料理や段取りが上手な主婦の皆さんや、「これ使いや」と野菜を持ってきてくれる男性陣の皆さんもいます。最近では高年生の吉本三紗さんがカフェを手伝いたいと声を掛けてくれまし

た。だから「みそぎの里」はみんなの力が結集されてできた場所――。地域で支えているカフェが、地域のよりどころになる、いい循環が生まれ始めています。

過疎でも愛を増やしたい

「なんかはせんといけん」とカフェを作り、守ってくれていた久保さんをはじめ、皆さんの苦労の上に今の私の活動があります。「いつも支えてくれる皆さんに恩返ししたい」という思いと、「任期後もずっとここで暮らしたい」という思いがあるので、過疎化の現実にも少しはあらがいたいです。仲間が増えたら、できることの幅はもっと広がるはず――。私たちが活動したいと思える場づくりと仕組みづくりがこれからの課題です。やれることは、まだまだたくさんあります。

地域柄や暮らしが垣間見られるカフェに来て、地域外のお客さんも御祓ファンになってくれたら、うれしい。「みそぎの里」から地域愛を広げていきたいです。

「ようこそ、みそぎの里へ――」
もっとたくさんの人にそう言えるよう、背伸びはせず、心を尽くしてお待ちしています。



1_「これ使いや」とハスイモを持ってきてくれた中川稔徳さん 2_3_向居さん夫妻とサトイモを収穫 4_ポップコーンにもインテリアにもなるとうきび 5_向居さんがにぎやかに販売している野菜。スタッフにも広がり品数が増えてきた 6_「好きなだけ持っていけ」とミョウガを渡す宮内俊文さん 7_家の庭や野に咲いた花を上手に活ける西川さん

